
紋章の使徒

将軍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紋章の使徒

【Nコード】

N2444L

【作者名】

將軍

【あらすじ】

『帝国』が強大な力で支配する世界。

その世界の片隅で、起きた小さな出来事は、やがて彼らが暮らす世界に

大きな変化を起こしていく。

登場人物紹介

キャラクター

「ミゲル」紋章の絵柄『死神』

平原の遊牧民族たちの一族で育てられた孤児。助けられるまでの記憶が全くない。

自分のゲルの前で助けた少女「セレナ」の腕に自分と同じ「紋章」を見つけ

その後、ゲルが山賊に襲われたため「セレナ」と共に自分の紋章の意味と

自分とセレナの出生の秘密を知るため旅を始めることとなる。

得意な武器は弓と湾刀（テグハと呼ばれる刀身が曲線を帯びている刀）

「セレナ」紋章の絵柄『死神』

「ミゲル」のゲルの前で倒れていた少女。助けられるまでの記憶をほとんどなくしている。

「ミゲル」と同じく腕に紋章があり、その紋章の絵柄が「ミゲル」のものと同じだったため、驚きを隠せなかった。「ミゲル」との間にある『何か』を探すために、行動を共にする。使用する武器は、見つかったときから腰にさしていた剣「ライトニングサンダー」（目を覚ました時点で彼女はこの名を覚えてはいなかった）

「デストロイヤー」紋章の絵柄は「巨人」

帝国の魔道剣士。腕に紋章がある（ミゲル達とは違う）

自称「この世で最も強い男」

使用武器は魔道剣「ファイラスゴット」（刀身から深紅の炎を繰り出し、相手を焼き尽くす力を持つ刀）

「ソード」紋章の絵柄「2つの顔を持つ鬼」

帝国軍第4軍団先遣隊所属の槍使い。普段は笑顔を絶やさない優しい人柄だが、

戦争時は鬼のように戦うため「鬼人ソード」と呼ばれている。

使用武器は「バスタード・ソード」

プロローグ

「いやな雲だな・・・」遊牧民族の一つである、パラガ族の長ルデンははるかかなたに見える、雲を見てつぶやいた。

雲は真つすぐ、垂直に伸び、まるで空にとどまっているかのように、移動しない

「こういう雲を見ると、良くも悪くも人生が変わるか・・・全くついてねえや。」

彼の一族をはじめとする大陸に存在する遊牧民族は一族に伝わる言い伝えや伝承を

重視し、生活の中にもその教えが浸透している。

『垂直に空に伸びる雲を見た者の、運命を神は変えられる』というのもその一つである。

「長！早く移動しましょう。後方で竜巻が発生しています！」部下が指差す先には

確かに砂あらしが発生している。距離的にはまだ遠いが、竜巻のスピードは速い。

おそらく数分でここも竜巻に巻き込まれる。

「バードタイガーに乗れ！全員ここから離脱するぞ！」「おお！」部下たちは次々と

自らの首に下げた笛を吹き鳴らす。乾いた草原に笛から流れ出る高い音色が流れていく。

『キアアアッ！』はるか上空から響く咆哮に皆が空を見上げる。

雲ひとつない青空の一角が黒くなっている。いや黒くなっているように見えたのは

彼らが呼んだものたちが集まって飛んでいるからだ。

「きました、バードタイガーです！」部下の1人が叫ぶと同時に上空を飛ぶ

バードタイガーの集団が急降下を始める。

『キアアアッ！』バードタイガーたちは次々と男たちがいる草原に着地する。

「よしよし、ケプティ―頼むぞ！」ルデンの声にまるで頷くかのよう

にバードタイガー『ケプティ―』は首を縦に振った。

「よし、離脱開始！」ルデンを乗せたバードタイガーがその巨大な翼を広げ

勢いよく走り始めた。他の部下を乗せたバードタイガーたちも、一斉に走り始める。

「さあ、飛べよ・・・いけ！」ルデンの声を合図にバードタイガーたちは

その背中にある巨大な純白の羽を広げ大きく一振りした。

次の瞬間、ルデンを乗せたバードタイガーを大空に向かって、舞い上がった。

「他の奴らもみんなついてきているな。」後方を向き、全員が無事についてきていることを確認したルデンは、ふと自分の手元に目を移し愕然とした。「手綱がない・・・」

空中を飛ぶバードタイガーを操るには手綱は必要不可欠な存在だ。なにしろ

手綱で方向を指示するのだから。手綱がないと村に戻れない。

「まじで、うっかりしすぎだぜ俺・・・」大慌てで型の袋を探り、やっと探し当てた

手綱をケプティ―に取り付けて、ルデンはため息をついた。

「やつぱり、あんな雲見るんじゃないかな・・・」ルデンの頭には先ほど見た

あの雲のことがこびりついて離れなかった。竜巻のことといい、手網紛失未遂のことといい、さつきからついてない。

「長、前方の大木の枝に人が引っ掛かっています！」後方にいる部下の一人が

前方にそびえる一本の大木を指差した。「あれは、ガルムの木・・・

「
彼らが暮らす草原に木はわずかしが生えていない。遊牧民族である、
彼らは

その希少な木に一つ一つ名前を付けていた。

『ガラムの木』というのもその一つで、遊牧民族の伝承に出てくる
怪物『ガラム』

が封じられたとされる場所に生えている木である。

「少年のようだが・・・」枝にぶら下がっているのはまだ、10歳
ほどの少年だった。

帝国の一般的な市民服の上にマントをはおっている。そして腰には
剣。

帝国の服を着ているということは少なくとも遊牧の民ではない。

しかし、帝国の市民なら、剣を持てるはずがない。帝国では民間人
が武器を持つことは禁じられている。もし武器の所有がばれた場合、
当人だけではなくその家族、親戚などすべてが刑に処せられる。

よって、武器を自ら所有しようと考えるものは、帝国に存在する武
器商ぐらいとなる。

だが、この少年が武器屋の下働きだとしても、どうやって帝国の監
視の目をくぐりぬけて

この地にやってきたのかがよくわからない。

なにしろ、昔ほどではないが今も帝国と遊牧の民は対立している。
帝国からこちらに向かうことは禁止されているはずなのだ。

「とりあえず、この子を運ぼう。村に戻って事情を聴かにやらん。
しかし、どうして木の枝に？」「おそらく、あの竜巻に吹き飛ばさ
れたのでしょう。」聞かれたわけでもないの隊長が話し出した。「
竜巻に巻き込まれたものは、一説によれば何キロも吹き飛ばされる
そうです。私たちがいた場所より後方で巻き込まれたその子が落ち
た場所が偶然

ガラムの木だった・・・と感じじゃないでしょうか。」すこし、
苦しいがまあ筋は通っているとルデンは頷いた「確かにそうかもな。

よし、この子は俺が運ぶ。お前は先に行つて

村の女どもに看護の準備をするよう伝えろ。」「了解!」隊長は2・

3人の部下を率いて

大空に向けて飛び上がっていった。

「さあて、これも運命かな。まさか、この子が俺の運命を変えるつてわけじゃないだろうな?」ルデンは自嘲気味につぶやくと、他の部下たちを率いて飛び上がっていった。

プロローグ（後書き）

はじめまして、將軍といたします。

この作品は私にとって初めて書く小説となります。

大変未熟な文章で申し訳ありませんが、お付き合いお願いします。

第1話 少年の目覚め

「ここは・・・」目を覚ました少年は周りを見渡した。自分がどうしてここにいるのか

そして自分が誰なのか、少年は全く覚えていなかった。

「おきたか、少年。」テントに入ってきたルデンが少年の顔を覗き込んだ。「お前はここから5キロほど離れた大木の枝にぶら下がっていたんだ。」少年は不思議そうな顔をして男を見た。「そうか、われらの言葉は通じないのだな。」やはりこの少年、遊牧民ではない、そう思いながらルデンは大陸共通語で同じことを繰り返した。

「誰が助けて下さったのですか？」ルデンは大陸共通語を嫌っているのでいらいらしていたが、それを表面に出さないよう落ち着いた表情を浮かべながら答えた「この私だ。」

少年は驚いた表情を浮かべた。「あなたの名は何と？」少年の問いに子供臭いものを感じられないことを疑問に感じながらもルデンは返した「人に聞くときはまず自分からというのが礼儀じゃないか？」少年は急に下を向いて黙ってしまったが、ルデンが催促すると突然しゃべりだした「思い出せないんです、どうして枝にぶら下がっていたのかも。自分の名前さえ、思い出せないんです。」

『この子、記憶をなくしているのか』ルデンは少々ばつが悪そうに笑いながら言った、「そうか、ならしかたがない、わが名はルデン。ルデン・パラガだ。」少年はルデンを見てニコツと笑った。

少年を連れて外に出たルデンは草原の上に広がる青空を見つめた、いつ見ても美しい空だ、少年の方はどうかと見てみると少年も青空を見つめている。

「どうしたんだ？」「いや、あの空の彼方に何があるか気になったのです。この青い空の向こうに何かがあるような気がするのです。」

「そうだな、確かにあの空の向こうには別の世界があるのだろう、おれたちの部族では空の向こうには平安地があるという言い伝えが

あるんだ。」「少年は不思議そうな顔をした「平安地？」「ああ、そこには我々の部族の今まで無くなった長たちが集い、永遠に争いのない世界を統治していると言い伝えられているのだよ。」「ふとルデンは少年が名を忘れていることを思い出した。

「お前は名を思い出せないんだったな。だったら俺が名をつけてやろうか。」

少年は驚いた顔をしながら言った「僕に名前を！？」「そうだ、わが父であり、先代の長でもあった者の名を付けてやろう『ミゲル』』というのはどうだ。」

「ミゲル、いい名ですね。どういう意味なのですか？」ルデンは少し遠くを見ながら言った「草原を駆ける風という意味だそうだ、おれたちは遊牧民族だからな誰にも縛られず、誰にも邪魔されることのない自由の象徴が風だから付けられたとよく言われた。」「少年はしばらく考えていたが

「じゃあ、お言葉に甘えてその名前をもらいます。」「ルデンの顔が明るくなった「よし！今日からお前の名前は「ミゲル」だ。ところでお前はどこかに行くあてもないんだろう？だったら俺達の一族として暮らしたらどうだ。少なくとも俺達の一族に後1人増えたって大丈夫だと思うが。」「少年の顔も明るくなった「じゃあ、たびたび甘えてすみませんけど、ここに置かせてもらいます」「そうときまつたら、お前は一族の一員なんだがら一族の姓をつけなきゃな。」「一族の姓・・・ってなんでしたっけ？」ルデンは少々、ずっこけたが気を取り直して言った。「パラガだ、君が一族の一員となつたらミゲル・パラガという名になるわけだな。」「少年、いやミゲルはルデンを期待と不安が

まじりあつた表情で見つめていたが急に心配そうに言った「僕が遊牧民族の生活に慣れることができるかな？」ルデンは彼を正面から見据えて言った「大丈夫さ、むしろ頭が真つ白なお前さんならすぐこの環境に慣れることができる。1年もすれば見違えたようになっているよ。」「ルデンの言葉にミゲルは力強く「うん！」と答えた。

第2話 少年の戦い（前書き）

一つ一つ話が短かくて、恐縮ですがご容赦お願いします。
なにしろ時間がなくて・・・

第2話 少年の戦い

「それ、そっちに行つたぞ！」草原に男達の声が響く「やつも今日こそは仕留めてやる。」

男達の視線の先にあるのは体長が2メートルはあろうかという『コロコッタ』だった

コロコッタとはライオンとハイエナの合わさったような猛獣で、はるか昔、それらの猛獣たちが地上から姿を消した後草原で繁殖した生物である。鳴き真似がうまく、牧童の声を真似て家畜をおびき出して食べてしまうので遊牧民族にとっては厄介な相手だった。

「いいか、一発で仕留めろよ・・・」弓を構えた男に向かって友人が忠告する

まさに矢が放たれようとしたその時だった。「グワオオオオオオ」真後ろで唸り声を発もう1匹のコロコッタが現れたのだ。「ぐわあああ！」肩を食いつかれた射手が絶叫

する。「この野郎！」射手の友人である男が腰に下げた湾刀を抜こうとする。

「グワオオオオ！」男の動作を確認にしたコロコッタは射手を離し、標的を

前方にいる男に変えた。「くそ、間に合わねえ・・・」コロコッタは走りながら

勢いよくとび跳ねた。まだ刀を抜き終わってない男は観念した「終わりか・・・」

男はすさまじい痛みと衝撃を覚悟して目をつぶった。「グワオ！」コロコッタの唸り声がした。だが肝心の衝撃や痛みはいつまでたつても来ない。ゆっくりと目を開けた男が見たのは目の前で倒れもがいているコロコッタだった。その腹には、ショートボウ

の矢が突き刺さっている。「あれは、毒矢？」コロコッタに突き刺さっている矢は

よく見れば赤い羽根が付いている。赤羽は毒を意味する。

「グワオオ・・・」明らかにコロコッタは衰弱している。何しろ遊牧の民が使う毒矢

は彼らがサランダーと呼ぶオオトカゲの毒であり、バードタイガーですら一撃で倒す猛毒なのである。解毒剤がない限り助からない。「助かった。しかし誰が・・・」矢が着たであろう方向を向いた男はその先の人影に目を凝らした。「あれは・・・ミゲルか！」彼の視線の先、大木の陰で弓を構える少年

『ミゲル』は毒の影響で完全に動きが止まっている一匹から、こちらを警戒し様子をつかがっているもう一匹にコロコッタに視線を変えた。

「グワオオオオオオ！」仲間を傷つけられて怒り心頭のコロコッタは唸り声をあげて

ミゲルに向かってきた。「無駄だよ・・・」ミゲルは素早く矢を構える「これだけ距離があるんだ、届かない。」ミゲルはコロコッタに向けて、先ほどに一匹に喰らわせたのと同じ赤羽の毒矢を放つ。

「グワオ！」ミゲルの放った矢は見事にコロコッタに眉間に突き刺さった。

「いまだ！」ミゲルとコロコッタの闘い（というより一方的な殺し）を

呆然と眺めてしまっていた男は我に返って飛び出した。

なにしろ、今コロコッタと闘っているミゲルは、まだ15である。

遊牧民族である

『パラガ』の民は16歳で『大人』と認められるので、15で戦っているからといって

大して問題がないように思えるが、それでも15歳まではまだ『子供』である。

村のおきての中には『16になるまで戦はするな。戦に巻き込まれた場合すぐに逃げろ』というものがある。

この教訓は、『大陸戦争』と今では呼ばれている大戦で人数の少ない遊牧民族側で、

闘えるものをすべて繰り出しての総力戦を仕掛けた結果、なんとか敵を撃退したものの

多くの若い人材を失ってしまい。回復まで長い年月が必要になったためである。

「ミゲル、こいつのとどめは俺がさす。お前は村に戻って長にこのことを報告してくれ！」ミゲルは一瞬、不満げな顔をしたが、すぐに頷き首にかけた笛を鳴らす。

「キアアアア！」すぐさまミゲルの所に一匹のバードタイガーが駆け寄ってきた。

その翼の色はバードタイガーにしては珍しく『黒』。突然変異種といえるだろう。

「よし、いい子だ。『ブラッド』早く長のもとに戻ろう。」ミゲルの声にブラッドは首を振ってこたえる。

「まじで、あり得んな。バードタイガーに人間の言葉が通じるなんて・・・」男の言う通りで、普通バードタイガーが人の言うことを理解し、意思の疎通ができる可能性は

ゼロに近い。もちろん過去にもそんな例はない。だが、ルデンのバードタイガーである

ブラッドだけはそれができるのだ。「もつとも、やつがルデンの言うことしか聞かんから大して意味ないが。」不思議なことにブラッドはルデン以外のものが話す言葉にはまるで反応しないのだ。

「さあ、行くよ！走れブラッド！」ルデンの声に従いブラッドはさまざまの勢いで走り始める。「飛んで！」ルデンの声を合図にブラッドは畳んでいた翼を広げ、大きく一振りする。次の瞬間ブラッドは大空に駆け上がるように飛んでいった。

「まったく、実際大した子だぜ。あれで長の『本当の息子』だったら・・・」

次の長になるのは間違いないだろうに。もったいねえこった。」「男は首を振り

地面に横たわる2匹のコロコッタに視線を向けた。

「さあて、こいつらの後始末をしなきゃな。」「男は苦笑いを浮かべながらコロコッタたちの方に向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2444/>

紋章の使徒

2010年10月10日02時57分発行